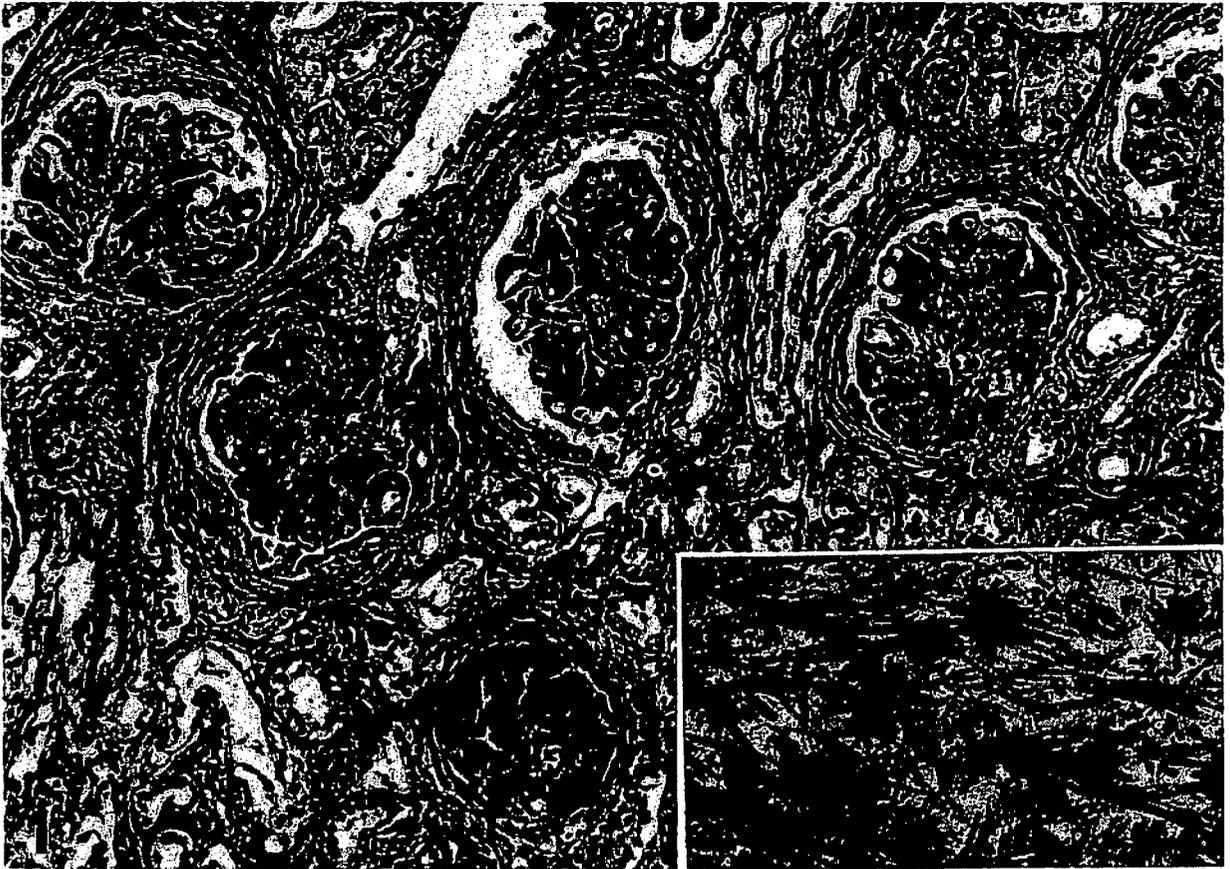


# 犬の糸球体硬化症

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第26回獣医病理学研修会標本No.465



動物：犬，シェパード，雌，6ヶ月齢。

臨床事項：本犬は「約10日前より下痢，嘔吐を示す」との稟告で来院した。初診時，体重11kg（正常の1/2～1/3）で顕著に発育不良，削瘦も著しかった。諸検査の結果，血清中の無機リン（33.5mg/dl），血液中の尿素窒素（221mg/dl），ならびにクレアチニン（6.6mg/dl）が高値で，腎不全と診断された。よって対症療法が施されたがその効なく，初診後3日目に死亡した。

剖検所見：剖検は某病院で行われたので詳細は明らかでないが，腎の異常には気づかれず，動脈管の開存，心の大動脈弁における石灰沈着が所見された。

腎の組織所見：糸球体の荒廃と石灰沈着が顕著であった（写真1，HE染色，×168）。前者は正常な糸球体を1ケも認め得ないほどび慢性に生じていた。荒廃した糸球体は，メサンギウム領域が著しく拡大して硝子化し，細胞成分は乏しく，その細胞の一部は萎縮していた。そして，ボウマン嚢を含めた糸球体周囲性線維化が極めて顕著であった。

石灰沈着は皮質に主座し，ほとんどの尿細管基底膜のほか，散在性に，変性・剝離した尿細管上皮，尿細管内円柱，硝子化した糸球体，線維化したボウマン嚢壁，半

月体にみられた。

硝子化した糸球体は，アザンならびにPAM染色を施すと，メサンギウム領域が細線維状にそれぞれ青染ならびに淡黒染した。しかし，コンゴレッド，PAS染色では陰性を示した。電顕的検索では，毛細血管基底膜には異常はなく，拡大したメサンギウム領域には膠原細線維（直径200～400Å，明帯と暗帯をなす横縞の間隔は600Å）が錯綜して増殖し（写真2，×20,000），一部ではメサンギウム基質の増加も認められた。

組織診断：「糸球体硬化症とこれに後続した石灰症（犬の家族性腎疾患を疑う）」と診断した。

本例の糸球体硬化症の先駆病変がどのような性質であったかは不明である。本例を家族性腎疾患のカテゴリーとみなしたい根拠として，本例が純系種の若齢であること，病像，さらには次の文献的知見をあげたい。すなわち，犬にはある特定の品種に家族性腎疾患が発生するが，その腎病変に対し，家族性糸球体硬化症（または糸球体腎炎），原発性糸球体腎症，腎硬化症などの診断名が与えられている。なお，本例の家族性発生に関する調査はなし得なかった。